

メッセージアウトライン

創世記47:27~31,49:29~33,50:15~26

「ヤコブの遺言とヨセフ」

47 : 27~31 ヤコブの遺言

[27]「さて、イスラエルはエジプトの国でゴシェンの地に住んだ。彼らはそこに所有地を得て、多くの子を生み、大いに数を増やした」

エジプトの地でファラオに次ぐ第二の権力者となっていたヨセフの計らいでヤコブの一族は、あの七年の大飢饉の時以来、エジプトのゴシェンの地に住むようになった。ゴシェンはナイル川河口東部の牧草の豊かな地帯。彼らはそこで多くの子を生み、非常に増えた。これも神の祝福のゆえであった。

[28]「ヤコブはエジプトの地で十七年生きた。ヤコブが生きた年月は百四十七年^{としつき}であった」

21世紀の現代に比べれば非常に長生きであるが、彼の父イサクは百八十歳、祖父アブラハムは百七十五歳まで生きた。→35:28、25:7 徐々に人間の寿命が短くなってきていることが分かる。

[29-31] ヤコブは自分の死ぬ日が近づいてきたことを感じて、ヨセフを呼び寄せて、自分をエジプトの地に葬らないでカナンの地にある先祖たちの墓に葬るようになり、誓わせる。彼は非常に体力が弱ってきて、ベッドから起き上がることができなかったようである。

「おまえの手を私のもの下に入れ」これは当時の厳粛な誓約の方法。かつてアブラハムも、そのしもべに息子イサクの妻となる女性を捜しに自分の出身地メソポタミアへ行かせる時に、同じ方法で誓わせている。→24:2~9

49 : 29~33 ヤコブの遺言と死

49:1~28節ではヤコブは死を間近にひかえて、子どもたちを呼び寄せ、各々にふさわしい祝福を与えたことが書かれている。これはイスラエルの十二部族が神の目的のために用いられ、その使命を全うできるようにするための祝福であり、また預言となっている。

[29-32]「また、ヤコブは彼らに命じた。『私は、私の民に加えられようとしている。私をヒッタイト人エフロンの畑地にある^{ほらあな}洞穴に、先祖たちとともに葬ってくれ』(29)

ここでヤコブは47章でヨセフに誓わせた神の約束の地カナンでの葬りについて自分の十二人の子どもたち全員に対してあらためて命じている。ヤコブのカナンのマクペラの地への埋葬はイスラエルの所有すべき神の約束の地がカナンであることをはっきりと示している。いくらゴシェンという良い地に住めるようになったといっても、そこは一時的な寄留の地であることに変わりはない。やがて時代が変わり、王が替わると彼らはその地で奴隷の苦役に服さなければならなくな

る。→出エジプト記1章 エジプトはイスラエルにとって永住する場所ではないのである。

[33]「ヤコブは息子たちに命じ終えると、足を床の中に入れ、息絶えて、自分の民に加えられた」

ヤコブは子どもたちを祝福するために最後の力を振りしぼり、さらに葬りの確認をし、すべての責任を果たして足を床の中に入れ、息絶えて死んだ。彼は先に召されていった先祖たちと同じ所へ行く時が来たことを十分にわきまえていたようである。

彼にとって、またすべての信仰者たちにとって死は終わりではなく、永遠の祝福への入り口となる。外見は弱り衰えて、いのち尽き果てたように見えても、彼が目を閉じ、息を引き取ったその瞬間、彼は先祖たちと同じく神のもとにいる。そしてそこで永遠に神とともに喜びと感謝と賛美をもって生きるのである。私たちが目指すべきところはそこである。

ただ、そこはすべての人間が自動的に行けるのではなく、神が私たちの罪の贖いのために送ってくださった救い主、神の御子イエス・キリストを信じ受け入れる必要がある。これが神の用意してくださった救いの条件である。聖書の言う罪とは犯罪のことではなく、私たち一人ひとりが、私たちにいのちを与え、守り、恵みを与えてくださる神を知らず、知ろうともせず、神に背き、自己中心に歩み、自分を傷つけ、人を傷つけ、的外れな生き方をしていることを指す。そしてそれは私たちの内側にしっかりと根付いており、どのような修行やまじないや悟りによっても克服することのできないものである。この罪の支払う報酬は死、永遠の滅びであるが、イエス・キリストにある者は永遠のいのちを持つ。→ローマ6：23

神はそのひとり子イエス・キリストを人としてこの世に送ってくださった。それがクリスマスの出来事であった。そしてこのイエスは地上で三十三年の生涯を歩まれ、福音を宣べ伝えられ、最後に十字架にかかられた。それは何か悪いことをしたからではなく、人びとのねたみから不当な裁判によってつけられたのである。しかし、この十字架の死こそ最初の人間アダムの墮落以来、神が計画されていたことであり、私たち人間の救いのためであった。本当は私たち罪ある人間がその罪のゆえにさばかれ、滅びなければならないのに、イエス・キリストがその罪の罰を身代わりに負ってくださったのである。そして誰でもこのイエスの十字架の死は自分のためであったと信じ、イエスを救い主として受け入れる者は救われ、神のものとなる。もはや裁かれて滅びることはない。これが聖書の教える福音である。そして信じた者はこの地上の人生を平安と喜びと感謝をもって生きることができ、やがてヤコブと同じく天の神のもと、永遠の祝福へと入ることができるのである。

50：15～26 良いことのための計らい

[15]「ヨセフの兄弟たちは、自分たちの父が死んだのを見たとき、『ヨセフはわ

れわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪に対して、仕返しをするかもしれない』と言った」

兄たちは父ヤコブの死後、ヨセフがかつて彼らから受けた仕打ちの、仕返しをするのではないかと再び恐れるようになった。彼らはヨセフにした悪い行いが赦されたとの自覚が十分ではなかったようである。そこで兄たちは父が生前に言ったということばを持ち出してヨセフに罪の赦しを求める。(16~17) これは恐れからの作り話とも考えられるが、実際に父ヤコブが不安を示す兄たちのために生前に命じたということも十分に考えられる。

「ヨセフは彼らのことばを聞いて泣いた」これは兄たちを心から赦している自分が理解されていないことの悲しみか、あるいは兄たちが過去の罪をこれほどまでに悔いていることを知って心を打たれたか、あるいは昔のことを思い出している感慨からか、恐らくすべてのものが含まれた涙であったであろう。

[18]「彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。『ご覧ください。私たちはあなたの奴隷です。』」

ここでもう一度ヨセフの見た夢が成就する。→37:5~8

[19-21] ヨセフのことばには信仰者として見習うべき多くの点がある。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか」(19) つまりさばきは神のみがなさることであって自分ではないということ。彼は悪をした者をさばくのではなく、人を正しくさばかれる神にそのことを委ねている。その一言で人を生かしても殺しもできるエジプトの権力者なのに、彼はさばきは神のなさることであることをよくわきまえている。

「あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことの計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです」(20) ヨセフは人のなした悪い行い、謀りごとに神の摂理を見ている。→ローマ8:28 これこそまことの神を信じる信仰者の姿である。「ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう。」ヨセフは彼らを安心させ、優しく語りかけた。(21) 彼は悪に報いるのに赦しをもってするだけではなく、思いやりと愛をもって報いている。すべての信仰者がこのように生きることができれば、神の国はこの地上にはっきりと現されてくるであろう。私たちはこのヨセフの模範に習わなければならない。

[22-23]「ヨセフとその一族はエジプトに住み、ヨセフは百十歳まで生きた。ヨセフはエフライムの子孫を三代まで見た。マナセの子マキルの子どもたちも生まれて、ヨセフの膝に抱かれた」

ヨセフは父ヤコブの死後五十四年生きたと思われる。

30歳で宰相になる+7年の豊作+2年の飢饉=39歳+父ヤコブがエジプトで生きた年数17年(47:27)=56歳(ヤコブがエジプトで死んだ時のヨセフの年齢) 110歳(ヨセフの寿命)-56歳=54年

[24]「ヨセフは兄弟たちに言った。『私はまもなく死にます。しかし、神は必ず

あなたがたを顧みて、あなたがたをこの地から、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に上らせてくださいます。』」

ヨセフも地上の生涯を終える時が来た。「兄弟たち」とは実際の兄弟か、あるいは親族も含まれるかもしれない。彼もエジプトがあくまでも一時滞在の寄留の地であるということをはっきり理解していた。そして神がイスラエルを再び約束の地へ導き入れてくださるということを確信していた。

[25-26]「ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、『神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上ってください』

と言った。ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺ひつぎに納めた」

ヤコブの時とは違って、ヨセフは自分の遺骸をイスラエルの民がエジプトを出る時に携え上ってくれるように遺言をした。

ヨセフの死をもってこの創世記は終わる。歳月は増し加わり、人は生き、そして死に、子に、孫にと世代は変わっていく。しかし、主なる神はそのような人間の歴史を変わることなく支配し導いておられる。ヨセフの受けた苦しみも悲しみも、神の摂理のうちにイスラエルの救いのために用いられ、やがてイスラエルは国家としての体をなし、神のご計画のうちに出エジプトの時が来るのである。

私たちもヨセフをこのように導き、成長させ、イスラエルの救いのために用いられた神をあがめ、賛美し、またヨセフが示した信仰の模範に習う者となり、人のした悪のさばきは神に委ね、神がすべてのことを相働かせて益としてくださることを信じ、悪に報いるのに愛と善行をもって報いる者になりたい。そしてそのようにできる力もすべて神が与えてくださるのである。

→ローマ12：19～21、8：28、マタイ7：7～8、ピリピ4：13、ヤコブ1：5、ヘブル13：7